



## 概要

---

この章の内容は、次のとおりです。

- [Cisco UCS Director Express for Big Data](#) (2 ページ)
- [Cisco UCS Integrated Infrastructure for Big Data](#) (2 ページ)
- [管理Cisco UCS DirectorとCisco UCS Director Express for Big Data性格](#) (3 ページ)
- [Cisco UCS Director Express for Big Data のVmware vSphereへのインストール](#) (9 ページ)
- [VMware vSphere での ビッグデータ ベアメタル エージェント向けのインストール](#) (12 ページ)
- [Cisco UCS Director Express for Big Data ベアメタル エージェント上の NTP サーバ設定](#) (13 ページ)
- [Oracle JDK ソフトウェアのバージョンを ベアメタル エージェントに追加する](#) (14 ページ)
- [Hadoop ディストリビューションの Cisco サーバのサポート](#) (15 ページ)
- [Splunk 企業展開の Cisco サーバサポート](#) (17 ページ)
- [Hadoop クラスタ用の新しい Red Hat バージョンの追加](#) (19 ページ)
- [サポート対象 Hadoop ディストリビューション](#) (20 ページ)
- [サポート対象 Splunk ディストリビューション](#) (20 ページ)
- [サポート対象 Oracle JDK のソフトウェアバージョン](#) (20 ページ)
- [Hadoop 配信のソフトウェアをアップグレードする](#) (23 ページ)
- [デジタル署名されたイメージ](#) (24 ページ)
- [アップグレードベアメタルエージェント](#) (26 ページ)
- [Cisco UCS Manager アカунトの設定](#) (26 ページ)
- [インスタント Hadoop クラスタを作成するハイレベルワークフロー](#) (26 ページ)
- [カスタマイズ Hadoop クラスタを作成するハイレベルワークフロー](#) (27 ページ)
- [デバイスコネクタ](#) (27 ページ)
- [から Cisco UCS Director Express for Big DataCisco Intersight を起動する](#) (31 ページ)
- [コネクタパックの管理](#) (33 ページ)
- [コネクタパックのアップグレード](#) (34 ページ)
- [コネクタパックのアップグレードに関する情報を表示する](#) (36 ページ)

## Cisco UCS Director Express for Big Data

Cisco UCS Director Express for Big Dataは、ビッグデータ インフラストラクチャの導入を自動化するCisco UCS Director内のワンタッチ操作のソリューションです。Cisco UCS Director Express for Big Data は、物理インフラストラクチャと Hadoop および Splunk Enterprise ソフトウェアに対処する単一の管理ペインを提供します。この製品は、Cloudera、MapR、Hortonworks を含む主要な Hadoop ディストリビューションをサポートしています。

Cisco UCS Director Express for Big Data が Hadoop クラスタの導入をエンドツーエンドで自動化することによって、クラスタをオンデマンドで起動し、拡張できるようになります。物理インフラストラクチャの設定は、ユーザによる入力を最小限に抑えながら自動的に行われます。設定にはコンピューティング、内部ストレージ、ネットワーク、およびオペレーティングシステム、Java パッケージ、Hadoop のインストールがあります。この自動化を実現するのは、Cisco UCS サービス プロファイルです。このプロファイルに含まれる物理インフラストラクチャと Hadoop 設定の両方が Hadoop クラスタ導入プロファイルに組み込まれます。

Cisco UCS Director Express for Big Data はまた、ユーザによる入力を最小限に抑えながら Splunk クラスタの導入をエンドツーエンドで自動化します。この自動化を実現するのは、Cisco UCS サービス プロファイルです。このプロファイルに含まれる物理インフラストラクチャと Splunk 設定の両方が Splunk クラスタ導入プロファイルに組み込まれます。

## Cisco UCS Integrated Infrastructure for Big Data

Cisco UCS Integrated Infrastructure for Big Data は、さまざまなビッグデータ ワークロードに対応するように設計された、業界トップのアーキテクチャです。このインフラストラクチャは処理およびストレージのニーズの増加に応じて、管理の問題を増やすことなく拡張するため、予測可能なパフォーマンスを実現するだけでなく、総所有コスト (TCO) を削減します。

Cisco UCS Integrated Infrastructure は次のコンポーネントで構成されています。

- Cisco UCS ファブリック インターコネクト
- Cisco UCS ファブリック エクステンダ
- Cisco UCS C シリーズ ラックマウント サーバ
- Cisco UCS S シリーズ ストレージ サーバ
- Cisco UCS 仮想インターフェイス カード (VIC)
- Cisco UCS Manager

Cisco UCS Integrated Infrastructure for Big Data の詳細については、[『Data Center Designs Cloud Computing - Design Zone for Big Data』](#) を参照してください。

# 管理Cisco UCS DirectorとCisco UCS Director Express for Big Data性格

Cisco UCS Director は、導入後に使用できるデフォルトのパーソナリティですが、Cisco UCS Director Express for Big Data、またはCisco UCS Director とCisco UCS Director Express for Big Dataの両方を使用することを選択できます。

パーソナリティはここで管理できます。[管理 (Administration)] > [ライセンス (License)] > [ライセンス キー (License Key)] > [パーソナリティの管理 (Manage Personalities)]。

表 1: パーソナリティ スイッチの動作

パーソナリティの選択	Cisco UCS Director の機能	Cisco UCS Director Express for Big Data の機能
Cisco UCS Director (デフォルト)	○	いいえ (No)
Cisco UCS Director Express for Big Data	いいえ (No)	対応
Cisco UCS DirectorおよびCisco UCS Director Express for Big Data	対応	対応



(注) パーソナリティに応じて、パーソナリティの選択から始めて、Cisco UCS Director および Cisco UCS Director Express for Big Data 機能はアプライアンスでサービスを再起動により有効または無効にされます。

## ユーザ ロールの作成

Cisco UCS Director Express for Big Data に固有のユーザ ロールを作成し、それらのユーザのメタデータと権限を定義できます。ロールにユーザを追加する前に、グループが作成されていることを確認します。



(注) デフォルト ロールかどうかは、システムで [ユーザ ロール (User Roles)] ページの [デフォルトのロール (Default Role)] 列に [はい (Yes)] とマークされているかどうかのみで判別できます。[Administration] > [System] > [User Roles] に移動します。

たとえば、次のユーザ ロールを作成し、それらのロールを持つユーザを作成できます。

- HadoopUser— Hadoop ユーザ

- HadoopAdmin— Hadoop 管理者

ユーザとグループの管理の詳細については、最新の『Cisco UCS Director Administration Guide』を参照してください。

## Hadoop の管理者権限

Hadoop の管理者が実行できるタスクは次のとおりです。

- 読み取り—ファイルの読み取りのみ行う権限。
- 書き込み—ファイルの読み取り、書き込み、変更を行う権限。
- 読み取り/書き込み—ファイルの読み取りまたはファイルへの書き込みを行う権限

次の表は、Hadoop 管理者が実行できる操作のリストを示します。

操作	アクセス権	
	Read	Write
仮想コンピューティング	Yes	○ (VM 管理アクションのみ)
VM ラベル	Yes	—
VDC への VM 割り当て	Yes	—
仮想ストレージ	対応	対応
仮想ネットワーク	対応	対応
物理コンピューティング	対応	対応
物理ストレージ	対応	対応
物理ネットワーク	対応	対応
グループのサービス リクエスト	対応	対応
承認者のサービス リクエスト	対応	対応
予算	対応	対応
リソース アカウンティング	Yes	—
チャージバック	Yes	—
システム管理者	対応	対応
ユーザとグループ	対応	対応
仮想アカウント	対応	対応

操作	アクセス権	
	Read	Write
カタログ	対応	対応
VDC	対応	対応
コンピューティング ポリシー	対応	対応
ストレージ ポリシー	対応	対応
ネットワーク ポリシー	対応	対応
サービス提供	対応	対応
リソース制限レポート	対応	対応
グループ ユーザ	対応	対応
Cloudsense レポート	対応	対応
Cloudsense アセスメント レポート	対応	対応
オーケストレーション	対応	対応
自動化モジュールを開く	対応	対応
CS 共有レポート	対応	対応
リモート VM アクセス	—	対応
モバイル アクセス設定	対応	対応
エンド ユーザのチャージバック	Yes	—
リソース グループ	対応	対応
タグ ライブラリ	対応	対応
ビッグデータ インフラ	Yes	—
ビッグデータ アカウント	—	対応
ビッグデータ クラスタ管理	—	対応
ビッグデータ ノード管理	—	対応
ビッグデータ パフォーマンス テスト	—	対応

操作	アクセス権	
	Read	Write
ビッグデータ サービスの管理	—	対応
ビッグデータ ロール管理	—	対応
ビッグデータ UCS SP テンプレート	—	対応
ビッグデータ Hadoop プロファイル テンプレート	—	対応
ビッグデータ Hadoop 導入テンプレート	—	対応
ビッグデータ クラスタ導入	—	対応
ビッグデータ ライセンスのアップロード	—	対応
ビッグデータ設定パラメータテンプレート	—	対応
ビッグデータ障害	—	対応
ビッグデータ設定 - QoS	—	対応
ビッグデータ設定 - IP プール	—	対応
ビッグデータ設定 - Pre_Cluster Sanity	—	対応
ビッグデータ設定 - Hadoop ソフトウェアのアップロード	—	対応
ビッグデータ設定 - 設定チェック ルール	—	対応
REST API アクセス	対応	対応
パスワードの変更を許可 - ユーザ	対応	対応

## Hadoop のユーザ権限

Hadoop のユーザが実行できるタスクは次のとおりです。

- 読み取り—ファイルの読み取りのみ行う権限。
- 書き込み—ファイルの読み取り、書き込み、変更を行う権限。

- 読み取り/書き込み—ファイルの読み取りまたはファイルへの書き込みを行う権限。

次の表は、Hadoop ユーザが実行できる操作のリストを示します。

操作	アクセス権	
	Read	Write
仮想コンピューティング	Yes	—
VM ラベル	Yes	—
VDC への VM 割り当て	Yes	—
仮想ストレージ	Yes	—
仮想ネットワーク	Yes	—
物理コンピューティング	Yes	—
物理ストレージ	Yes	—
物理ネットワーク	Yes	—
グループのサービス リクエスト	対応	対応
承認者のサービス リクエスト	対応	対応
予算	Yes	—
リソース アカウンティング	Yes	—
チャージバック	Yes	—
システム管理者	Yes	—
ユーザとグループ	Yes	—
仮想アカウント	Yes	—
カタログ	Yes	—
VDC	Yes	—
コンピューティング ポリシー	Yes	—
ストレージ ポリシー	Yes	—
ネットワーク ポリシー	Yes	—
サービス提供	Yes	—

操作	アクセス権	
	Read	Write
リソース制限レポート	Yes	—
グループ ユーザ	Yes	—
CloudSense レポート	Yes	—
CloudSense アセスメント レポート	Yes	—
オーケストレーション	—	—
自動化モジュールを開く	—	—
CS 共有レポート	—	—
リモート VM アクセス	—	—
モバイル アクセス設定	—	—
エンド ユーザのチャージバック	—	—
リソース グループ	—	—
タグ ライブラリ	—	—
ビッグデータ インフラ	Yes	—
ビッグデータ アカウント	—	—
ビッグデータ クラスタ管理	—	—
ビッグデータ ノード管理	—	—
ビッグデータ パフォーマンス テスト	—	—
ビッグデータ サービスの管理	—	—
ビッグデータ ロール管理	—	—
ビッグデータ UCS SP テンプレート	—	—
ビッグデータ Hadoop プロファイル テンプレート	—	—



操作	アクセス権	
	Read	Write
ビッグデータ Hadoop 導入テンプレート	—	—
ビッグデータ クラスタ導入	—	—
ビッグデータ ライセンスのアップロード	—	—
ビッグデータ設定パラメータテンプレート	—	—
ビッグデータ障害	—	—
ビッグデータ設定 - QoS	—	—
ビッグデータ設定 - IP プール	—	—
ビッグデータ設定 - Pre_Cluster Sanity	—	—
ビッグデータ設定 - Hadoop ソフトウェアのアップロード	—	—
ビッグデータ設定 - 設定チェック ルール	—	—
REST API アクセス	Yes	—
ユーザーのパスワードの変更を許可します。	—	—

## Cisco UCS Director Express for Big Data の Vmware vSphere へのインストール

Cisco UCS Director、リリース 6.5 OVF ファイルには Cisco UCS Director Express for Big Data リリース 3.5 が含まれています。



- (注) OVF 導入には VMware vCenter を使用することを推奨します。VMware vCenter のバージョン 5.x 以降がサポートされます。OVF 導入ウィザードは、IPv4 アドレスのみをサポートします。IPv6 が必要な場合は、IPv4 アドレスを使用して OVF を導入してから、ShellAdmin を使用して IPv6 アドレスを設定します。

### 始める前に

VMware vSphere または vCenter に接続するには、管理者権限が必要です。Cisco UCS Director では、Cisco UCS Director で VMware vCenter の設定を検出、管理、自動化する管理者権限を持った、ユーザアカウントが必要です。これらの操作には、VM、ESXi ホストおよびクラスター、データストアおよびデータストアクラスター、標準/DVスイッチ、そして仮想ネットワークポートグループの作成、削除、および修正が含まれています。



(注) DHCP を使用しない場合は、IPv4 アドレス、サブネットマスク、デフォルトゲートウェイの情報が 필요합니다。

- ステップ 1** VMware vSphere クライアントにログインします。
- ステップ 2** **[Navigation]** ペインで、Cisco UCS Director を導入する **データセンター** を選択します。  
『[Cisco UCS Director Installation on VMware vSphere](#)』を参照してください。
- ステップ 3** **[File]** > **[Deploy OVF Template]** を選択します。
- ステップ 4** **[Source]** ペインで、次のいずれかの手順で OVF ソースロケーションを選択します。
- **[参照 (Browse)]** をクリックし、OVF をダウンロードしたロケーションに移動してファイルを選択し、**[開く (Open)]** をクリックします。
  - **FQDN** (完全修飾ドメイン名) を、ローカルエリアネットワーク上で OVF が保存されている場所の URL のパス (IP アドレスまたはドメイン名を含む) に置き換え、**[次へ (Next)]** をクリックします。
- ステップ 5** **[OVF テンプレートの詳細 (OVF Template Details)]** ペインで、詳細情報を確認して **[次へ (Next)]** をクリックします。
- ステップ 6** **[Name and Location]** ペインで、次を実行します。
- a) **[名前 (Name)]** フィールドでデフォルトの VM 名を編集します。
  - b) **[在庫場所 (Inventory Location)]** 領域から、ビッグデータ向け Cisco UCS Director Express が導入されている在庫場所を選択し、**[次へ (Next)]** をクリックします。  
(注) ステップ 2 でデータセンターを選択した場合は、オプション b が使用できないことがあります。
  - c) **[Next]** をクリックします。
- ステップ 7** **[リソースプール (Resource Pool)]** ペインで必要なホスト、クラスター、またはリソースプールを選択して、**[次へ (Next)]** をクリックします。
- ステップ 8** **[ディスクフォーマット (Disk Format)]** ペインで、次のいずれかのオプションを選択して、**[次へ (Next)]** をクリックします。
- **[Thick Provisioned (Lazy Zeroed)]** 形式：シック形式で即座にストレージを割り当てます。これは推奨形式です。すべてのビッグデータ向け Cisco UCS Director Express パフォーマンスデータはこのフォーマットで検証されます。

- [シック プロビジョニング (Eager Zeroed) (Thick Provisioned (Eager Zeroed))] フォーマット：シック形式でストレージを割り当てます。このオプションを使用してディスクを作成する場合、時間がかかることがあります。
- シンプロビジョニング フォーマット—データをディスクに書き込むときに、必要に応じてストレージを割り当てます。

(注) [シンプロビジョニング (Thin Provisioned)] フォーマットを選択しないことが推奨されます。

**ステップ 9** [Properties] ペインで、次の情報を入力し、[Next] をクリックします。

- [管理 IP アドレス (Management IP Address)] : eth0 に使用する管理 IP アドレス。ネットワークで DHCP を使用している場合、デフォルト値 0.0.0.0 のままにします。
- [管理 IP サブネット マスク (Management IP Subnet Mask)] : eth0 に使用する管理 IP サブネット マスク。ネットワークで DHCP を使用している場合、デフォルト値 0.0.0.0 のままにします。
- Gateway IP Address

**ステップ 10** [終了準備の完了 (Ready to Complete)] ウィンドウで、次の操作を実行します。

- a) 前のペインで選択したオプションを確認します。
- b) [導入後に起動 (Power on after deployment)] をオンにします。  
このボックスをオンにしない場合は、導入後に VM を手動で起動する必要があります。
- c) [Finish] をクリックします。

**ステップ 11** アプライアンスが起動したら、表示されている ビッグデータ向け Cisco UCS Director Express の管理 IP アドレスをコピーし、サポートされている Web ブラウザに貼り付けて、[ログイン (Login)] ページにアクセスします。

**ステップ 12** [Login] ページでは、ユーザ名の admin とログインパスワードの admin を入力します。

(注) 初回ログイン後にデフォルトの管理パスワードを変更することが推奨されます。

**ステップ 13** [Administration] > [License] の順に選択します。

**ステップ 14** [ライセンス (License)] ページで、[ライセンス キー (License Keys)] をクリックします。

**ステップ 15** [パーソナリティの管理 (Manage Personalities)] をクリックします。

**ステップ 16** [パーソナリティの設定 (Personality Configuration)] 画面で、必要なパーソナリティを確認します。

必要に応じて、[UCSD] または [ビッグ データ (Big Data)]、あるいはその両方のパーソナリティをオンにできます。

**ステップ 17** [送信 (submit)] をクリックします。

**ステップ 18** デフォルトの shelladmin 資格情報 (たとえば shelladmin/changeme) を使用して Cisco UCS Director VM のコンソールにログインし、選択したパーソナリティを適用します。

- a) プロンプトに従って、デフォルトパスワードを変更します。
- b) [Cisco UCS Director Shell] メニューから [サービスの停止 (Stop Services)] を選択し、Enter キーを押します。

- c) **Enter** キーを押してメインメニューに戻ります。
- d) **[Cisco UCS Director Shell]** メニューから **[サービスの開始 (Start Services)]** を選択し、**Enter** キーを押します。
- e) **Enter** キーを押してメインメニューに戻ります。
- f) すべてのサービスが開始していることを確認するには、**[サービスのステータスを表示 (Display services status)]** を選択します。
- g) **[終了 (Quit)]** を選択します。

## VMware vSphere でのビッグデータ ベアメタル エージェント向けのインストール

### 始める前に

- VMware vSphere または vCenter のシステム管理者権限を持っている必要があります。
- DHCP ではなく静的 IP アドレスを使用する場合は、以下の情報が必要です。
  - IP アドレス。
  - サブネット マスク
  - デフォルト ゲートウェイ

- ステップ 1 Cisco UCS Director 用の Cisco.com ダウンロード サイトから、Cisco UCS Director ベア メタル エージェントをダウンロードして、OVF ファイルを解凍します。
- ステップ 2 VMware vSphere クライアントにログインします。
- ステップ 3 [ナビゲーション] ペインで、ビッグデータ ベアメタル エージェント向けを展開する vSphere ホストをクリックします。
- ステップ 4 **[File] > [Deploy OVF Template]** を選択します。
- ステップ 5 [OVF テンプレートのデプロイ (Deploy OVF Template)] ウィンドウの [ソース (Source)] 画面で、次のいずれかを実行し、OVF ソースの場所を選択してから、[次へ (Next)] をクリックします。
  - OVF ファイルがローカルコンピュータに格納されている場合、その場所を参照し、ファイルを選択して、[開く (Open)] をクリックします。
  - OVF ファイルがローカルエリアネットワーク上のサーバ上に保存されている場合は、そのサーバの IP アドレスまたは完全修飾ドメイン名を含むファイルの場所を入力します。
- ステップ 6 [OVF テンプレートの詳細 (OVF Template Details)] 画面で、詳細情報を確認して [次へ (Next)] をクリックします。
- ステップ 7 [エンドユーザ ライセンス契約 (End User License Agreement)] 画面で、ライセンス契約書を読んでから [同意する (Accept)] をクリックします。

- ステップ 8** [名前と場所 (Name and Location) ]画面で、次の手順を実行します。
- [名前 (Name) ]フィールドに、VM の一意の名前を入力します。
  - [インベントリの場所 (Inventory Location) ]エリアで、VM を配置する場所を選択します。
  - [Next] をクリックします。
- ステップ 9** [ストレージ (Storage) ]画面で、VM のストレージの場所を選択し、[次へ (Next) ]をクリックします。
- ステップ 10** [ディスク フォーマット (Disk Format) ]画面で、[次へ (Next) ]をクリックして、デフォルトのラジオボタン[シック プロビジョニング (Lazy Zeroed) (Thick Provision (Lazy Zeroed))]形式を受け入れます。
- ステップ 11** [ネットワーク マッピング (Network Mapping) ]画面で、VM のネットワークを選択し、[次へ (Next) ]をクリックします。
- ステップ 12** [プロパティ (Properties) ]画面で、次の手順を実行します。
- 次のように、割り当てる NIC の両方 (eth0 および eth1) に IP アドレスを設定します。
    - DHCP を使用して IP アドレスを割り当てるには、IP アドレス フィールドをデフォルトの 0.0.0.0 のままにします。
    - 静的 IP アドレスを使用するには、IP アドレス フィールドに必要な IP アドレスを入力します。1 つの NIC だけを設定する場合は、1 つ目の IP アドレスのセットだけを入力して、2 つ目のセットはデフォルトのままにします。
  - [Next] をクリックします。
- ステップ 13** [終了準備の完了 (Ready to Complete) ]画面で、設定を確認し、[終了 (Finish) ]をクリックします。ビッグデータ ベアメタル エージェント向け が展開されていることを示すメッセージが表示されます。
- ステップ 14** Cisco UCS Director Express for Big Data Bare Metal Agent サーバにルート権限でログインし、Cisco UCS Director Express for Big Data Bare Metal Agent サーバに対して ping を送信できるかどうかを確認します。
- ステップ 15** [ナビゲーション (Navigation) ]ペインで Cisco UCS Director Express for Big Data Bare Metal Agent サーバを右クリックし、[設定の編集 (Edit Settings) ]を選択します。
- [リソース (Resources) ]タブを選択します。
  - [リソース割り当て (Resource Allocation) ]ウィンドウで、CPU とメモリの [予約 (Reservation) ]設定を最大に設定します。
  - [OK] をクリックします。
- ステップ 16** VM の電源をオンにします。

## Cisco UCS Director Express for Big Data ベアメタル エージェント上の NTP サーバ設定

Cisco UCS Director Express for Big Data ベアメタルエージェントは、クロックを外部の NTP サーバに同期させるように設定できます。こうすることで、ベアメタルエージェントの日時を常に正しくしておくことができます。

Hadoop クラスタを展開する前に、Cisco UCS Director Express for Big Data と Cisco UCS Director Express for Big Data ベアメタルエージェントを同期させてください。設定済みのNTPサーバで Cisco UCS Manager と Cisco UCS Director Express for Big Data を同期させることをお勧めします。

次の手順に従って、`ntp_server_config.sh` を検索します。

- `/Opt/cnsaroot/bigdata_templates/ntp_server_config.sh` を検索します
- 実行許可を追加します (`chmod+x ntp_server_config.sh`)
- サーバ上で以下を実行します (`./ntp_server_config.sh <ntp_server_ip or hostname>`)  
Cisco UCS Director Express for Big Data Bare Metal Agent

。

## Oracle JDK ソフトウェアのバージョンをベアメタルエージェントに追加する

インスタント Hadoop クラスタおよびカスタマイズされた Hadoop クラスタの作成アクションにより、すべての Hadoop ディストリビューション (Cloudera、MapR、および Hortonworks) 用に Oracle JDK ソフトウェアをアップロードして Oracle JDK を使用できます。また、既存のクラスタに新しいノードを追加したり、既存のクラスタのアップグレードをサポートしたりできます。

---

**ステップ 1** Cisco UCS Director ベア メタル エージェント サーバにログインします。

**ステップ 2** [ソリューション (Solutions)] > [ビッグ データ (Big Data)] > [設定 (Settings)] に移動し、[ソフトウェア カタログ (Software Catalogs)] タブをクリックして、各バージョンの JDK ソフトウェア バージョン フォルダ名を作成します。

**ステップ 3** 各バージョンのフォルダに、JDK ファイルを .rpm 形式か .gz 形式でコピーします。

**ステップ 4** メニューバーで、[管理 (Administration)] > [統合 (Integration)] を選択して、ソフトウェアのアップロードを追跡します。

**ステップ 5** 進行中のソフトウェアのアップロードを追跡し、完了、失敗、タイムアウトのいずれの結果になったかを確認するには、[レコードの変更 (Change Record)] タブをクリックします。

---

# Hadoop ディストリビューションの Cisco サーバのサポート

このテーブルは、Cisco UCS Director Express for Big Data の Cisco UCS ハードウェアとソフトウェアとの互換性を示します。この表は Cisco UCS のハードウェアおよびソフトウェアの互換性については反映されていません。

Cisco UCS との互換性のある適切なリリースについては、[『Cisco UCS Hardware and Software interoperability Matrices』](#) を参照してください。



---

(注) すべての Cisco UCS Director Express for Big Data の機能がサポートされている Cisco UCS ソフトウェアのすべてのバージョンで使用できない場合があります。software.特定の機能は、古いバージョンの Cisco UCS ソフトウェアで使用できない場合があります。

---

コンポーネント	サポートされるモデル	サポート対象のソフトウェア	
		旧バージョン	新バージョン
Cisco UCS Manager	Software	Cisco UCS インフラストラクチャバンドルと Cisco UCS Manager ソフトウェアバンドルのリリース 2.2	M3 ラック サーバ用の、Cisco UCS インフラストラクチャバンドルと Cisco UCS Manager ソフトウェアバンドルのリリース 3.1(2b)、リリース 3.1(2f)、およびリリース 3.2(0.204a)  M4 ラックサーバとストレージサーバ用の、Cisco UCS インフラストラクチャバンドルと Cisco UCS Manager ソフトウェアバンドルのリリース 3.1(2b)、リリース 3.1(2f)、およびリリース 3.2(0.204a)  M5ラック サーバ用の、Cisco UCS インフラストラクチャバンドルと Cisco UCS Manager ソフトウェアバンドルのリリース 3.2(1)
Cisco UCS 6200 シリーズ Fabric Interconnect	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 6248UP</li> <li>• 6296UP</li> </ul>	Cisco UCS インフラストラクチャバンドルと Cisco UCS Manager ソフトウェアバンドルのリリース 2.2	Cisco UCS インフラストラクチャバンドルと Cisco UCS Manager ソフトウェアバンドルのリリース 3.1(2b)
Cisco UCS 2000 シリーズ FEX モジュール	2232PP 10GigE	Cisco UCS インフラストラクチャバンドルと Cisco UCS Manager ソフトウェアバンドルのリリース 2.2	Cisco UCS インフラストラクチャバンドルと Cisco UCS Manager ソフトウェアバンドルのリリース 3.1(2b)



コンポーネント	サポートされるモデル	サポート対象のソフトウェア	
		旧バージョン	新バージョン
Cisco UCS C シリーズ ラックマウントサーバ (Cisco UCS Manager で 管理)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• C240 M3 ラックサーバ</li> <li>• C240 M4 ラックサーバ</li> <li>• C240 M5 ラックサーバ</li> <li>• C220 M3 ラックサーバ</li> <li>• C220 M4 ラックサーバ</li> <li>• C220 M5 ラックサーバ</li> <li>• S3260 M4 ストレージサーバ</li> </ul>	Cisco UCS C シリーズ ラックマウントサーバ ソフトウェアバンドル のリリース 2.2	<p>Cisco UCS C シリーズ ラックマウントサーバ ソフトウェアバンドル のリリース 3.2(2d)</p> <p>M4ラック サーバおよ びストレージサーバ用 の、Cisco UCS インフ ラストラクチャバンド ルと Cisco UCS Manager ソフトウェア バンドルのリリース 3.1(2b)</p> <p>M5ラック サーバ用 の、Cisco UCS インフ ラストラクチャバンド ルと Cisco UCS Manager ソフトウェア バンドルのリリース 3.2(1)</p>
Cisco UCS 6300 シリー ズファブリック イン ターコネク	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 6324</li> <li>• 6332</li> <li>• 6332-16UP</li> </ul>	Cisco UCS インフラ ストラクチャバンドルと Cisco UCS Manager ソ フトウェアバンドルの リリース 3.1	Cisco UCS インフラ ストラクチャバンドルと Cisco UCS Manager ソ フトウェアバンドルの リリース 3.1(3b)

## Splunk 企業展開の Cisco サーバサポート

このテーブルは、Cisco UCS Director Express for Big Data の Cisco UCS ハードウェアとソフトウェアとの互換性を示します。この表は Cisco UCS のハードウェアおよびソフトウェアの互換性については反映されていません。

Cisco UCS との互換性のある適切なリリースについては、[『Cisco UCS Hardware and Software interoperability Matrices』](#) を参照してください。



(注) すべての Cisco UCS Director Express for Big Data の機能がサポートされている Cisco UCS ソフトウェアのすべてのバージョンで使用できない場合があります。software.特定の機能は、古いバージョンの Cisco UCS ソフトウェアで使用できない場合があります。

コンポーネント	サポートされるモデル	サポート対象のソフトウェア	
		旧バージョン	新バージョン
Cisco UCS Manager	Software	Cisco UCS インフラストラクチャバンドルと Cisco UCS Manager ソフトウェアバンドルのリリース 2.2	Cisco UCS インフラストラクチャバンドルと Cisco UCS Manager ソフトウェアバンドル、リリース 3.1(2b)、リリース 3.1(2f) および M3 ラック サーバのリリース 3.2(0.204a)  Cisco UCS インフラストラクチャバンドルと Cisco UCS Manager ソフトウェアバンドル、リリース 3.1(2b)、リリース 3.1(2f) および M4 ラック サーバのリリース 3.2(0.204a)
Cisco UCS 6200 シリーズ Fabric Interconnect	6296UP 6248UP	Cisco UCS インフラストラクチャバンドルと Cisco UCS Manager ソフトウェアバンドル リリース 2.2 :	Cisco UCS インフラストラクチャバンドルと Cisco UCS Manager ソフトウェアバンドルリリース 3.2(2d) :
Cisco UCS C シリーズ ラックマウント サーバ (Cisco UCS Manager で管理)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• マスタ ノード、展開ノード、および検索ヘッドの C220 M4 ラック サーバ。</li> <li>• インデクサの C240 M4 ラック サーバと S3260 M4 ストレージサーバ。</li> <li>• C240 M5 ラック サーバ</li> <li>• C220 M5 ラック サーバ</li> </ul>	Cisco UCS C シリーズ ラックマウント サーバ ソフトウェアバンドル、リリース 2.2	Cisco UCS C シリーズ ラックマウント サーバ ソフトウェアバンドルのリリース 3.2(2d)  M4 ラック サーバおよびストレージサーバの Cisco UCS インフラストラクチャバンドルと Cisco UCS Manager ソフトウェアバンドル、リリース 3.1(2b)

コンポーネント	サポートされるモデル	サポート対象のソフトウェア	
		旧バージョン	新バージョン
Cisco UCS 6300 シリーズ Fabric Interconnect	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 6324</li> <li>• 6332</li> <li>• 6332-16UP</li> </ul>	Cisco UCS インフラストラクチャ バンドルと Cisco UCS Manager ソフトウェア バンドルのリリース 3.1	Cisco UCS インフラストラクチャ バンドルと Cisco UCS Manager ソフトウェア バンドルのリリース 3.1(3b)

## Hadoop クラスタ用の新しい Red Hat バージョンの追加

サポートされているバージョンの Red Hat Enterprise Linux をアップロードする方法に関する詳細は、『*Cisco UCS Director Express for Big Data Management Guide*』の 12 章「Managing Hadoop and Splunk Clusters」を参照してください。

- 
- ステップ 1** メニューバーから、[ソリューション (Solutions)] > [ビッグデータ (Big Data)] > [設定 (Settings)] の順に選択します。
- ステップ 2** [ソフトウェア カタログ (Software Catalogs)] タブをクリックします。
- ステップ 3** [Add] をクリックします。
- ステップ 4** [Upload] をクリックします。
- ステップ 5** [Target BMA] ドロップダウンリストからターゲット Cisco UCS Director Express for Big Data Bare Metal Agent を選択します。
- ステップ 6** 必要なファイルをアップロードしてから、[Restart BMA Services] チェック ボックスをオンにして Cisco UCS Director Express for Big Data Bare Metal Agent を再起動します。
- ステップ 7** 新しい Red Hat バージョン (オペレーティング システム ソフトウェア) が Cisco UCS Director Express for Big Data サーバで使用できることを確認するには、次の手順を実行します:
- Cisco UCS Director Express for Big Data ユーザー インターフェイスにログインします。
  - メニューバーで、[Manage] > [Physical Accounts] の順に選択します。
  - [Bare Metal Agent] タブをクリックします。
- [ベア メタル エージェント (Bare Metal Agent)] レポートの [イメージ カタログ (Image Catalogs)] 列に新しい Red Hat バージョンがリストされているのを確認できます。
- 

## 新しい RHEL バージョン

### Red Hat Enterprise Linux 7.2

次のファイルをダウンロードします。

- `rhel-server-7.2-x86_64-dvd.iso` ([Red Hat Enterprise Linux](#) から)

## サポート対象 Hadoop ディストリビューション

Cisco UCS Director Express for Big Data 次の Hadoop ディストリビューションをサポートしています。

- Cloudera 5.4、5.5、5.6、5.8、5.10、5.11、5.13、および 5.14
- MapR 3.1、4.0、4.1、5.0、5.1、5.2、および 6.0
- Hortonworks 2.1、2.2、2.3、2.4、2.5.3、2.6.3、および 2.6.4

## サポート対象 Splunk ディストリビューション

Cisco UCS Director Express for Big Data 次の Splunk ディストリビューションをサポートしています。

Splunk ディストリビューション	サポート対象 Splunk ディストリビューションバージョン
Splunk	6.3.2、6.4.0、6.5.2、6.6.1、および 7
アップグレードする Splunk ディストリビューションバージョン	サポート対象アップグレードバージョン
Splunk 6.4	Splunk 6.5
Splunk 6.4	Splunk 6.6.1
Splunk 6.5.2	Splunk 7
Splunk 6.6.1	Splunk 7

## サポート対象 Oracle JDK のソフトウェアバージョン

この項では、サポートされている Oracle JDK のソフトウェアのバージョンを示します。

### Cloudera 向けサポート対象 Oracle JDK バージョンおよびアップグレードシナリオ

Hadoop ディストリビューション	Oracle JDK 1.7	Oracle JDK 1.8
Cloudera Enterprise 5.14.0	—	JDK 1.8.0_121

Hadoop ディストリビューション	Oracle JDK 1.7	Oracle JDK 1.8
Cloudera Enterprise 5.13.1	—	JDK 1.8.0_121
Cloudera Enterprise 5.11.1	—	JDK 1.8.0_121
Cloudera Enterprise 5.10.0	—	JDK 1.8.0_121
Cloudera Enterprise 5.8.0	JDK 1.7.0_25	JDK 1.8.0_60
Cloudera Enterprise 5.6.x	JDK 1.7.0_25	JDK 1.8.0_60
Cloudera Enterprise 5.5.0	JDK 1.7.0_25	JDK 1.8.0_60
Cloudera Enterprise 5.4.x	JDK 1.7.0_25	JDK 1.8.0_60
Cloudera Enterprise 5.3.x	—	JDK 1.8.0_11

アップグレードする Hadoop ディストリビューションバージョン	サポート対象アップグレードバージョン
Cloudera Enterprise 5.4.x、JDK 1.8	Cloudera Enterprise 5.5.0、JDK 1.8
Cloudera Enterprise 5.4.x、JDK 1.8	Cloudera Enterprise 5.6.x、JDK 1.8
Cloudera Enterprise 5.4.x、JDK 1.8	Cloudera Enterprise 5.8.x、JDK 1.8
Cloudera Enterprise 5.6.x、JDK 1.8	Cloudera Enterprise 5.8.x、JDK 1.8
Cloudera Enterprise 5.8.0、JDK 1.8	Cloudera Enterprise 5.10.0、JDK 1.8
Cloudera Enterprise 5.8.0、JDK 1.8	Cloudera Enterprise 5.11.1、JDK 1.8
Cloudera Enterprise 5.8.2、JDK 1.8	Cloudera Enterprise 5.13.1、JDK 1.8
Cloudera Enterprise 5.11.1、JDK 1.8	Cloudera Enterprise 5.13.1、JDK 1.8

## MapR 向けサポート対象 Oracle JDK バージョンおよびアップグレード シナリオ

Hadoop ディストリビューション	JDK 1.7	JDK 1.8
MapR 6.0	—	対応
MapR 5.2.2	—	対応
MapR 5.2.1	—	対応

Hadoop ディストリビューション	JDK 1.7	JDK 1.8
MapR 5.2.0	対応	対応
MapR 5.1.0	対応	対応
MapR 5.0.0	対応	対応
MapR 4.1.0	—	対応

  

アップグレードする Hadoop ディストリビューションバージョン	サポート対象アップグレードバージョン
MapR 5.2.1、JDK 1.8	MapR 6.0.0、JDK 1.8
MapR 5.0.0、JDK 1.8	MapR 5.1.0、JDK 1.8
MapR 4.0.2、JDK 1.8	MapR 5.2.0、JDK 1.8

## Hortonworks 向けサポート対象 Oracle JDK ソフトウェア バージョンおよびアップグレード シナリオ

Hadoop ディストリビューション	JDK 1.7	JDK 1.8
Hortonworks 2.6.4	—	対応
Hortonworks 2.6.3	—	対応
Hortonworks 2.5.3	—	対応
Hortonworks 2.4	—	対応
Hortonworks 2.3	—	対応
Hortonworks 2.2	対応	対応

  

アップグレードする Hadoop ディストリビューションバージョン	サポート対象アップグレードバージョン
Hortonworks 2.2、JDK 1.7	Hortonworks 2.3、JDK 1.8
Hortonworks 2.2、JDK 1.7	Hortonworks 2.4、JDK 1.8

# Hadoop 配信のソフトウェアをアップグレードする

次の Hadoop 配信から最新の Hadoop 配信にアップグレードすることができます。

表 2: Cloudera

アップグレードする Hadoop ディストリビューションバージョン	サポート対象アップグレードバージョン
Cloudera 5.0.1	Cloudera 5.4.1
Cloudera 5.0.6	Cloudera 5.4.1
Cloudera 5.2.0	Cloudera 5.4.1
Cloudera 5.2.1	Cloudera 5.4.1
Cloudera 5.3.0	Cloudera 5.4.1
Cloudera 5.4.x	Cloudera 5.6.x
Cloudera 5.8.0	Cloudera 5.10.0
Cloudera 5.8.0	Cloudera 5.11.1
Cloudera 5.8.2	Cloudera 5.13.1
Cloudera 5.8.2	Cloudera 5.14.0
Cloudera 5.11.1	Cloudera 5.13.1
Cloudera 5.11.1	Cloudera 5.14.0

表 3: MapR

アップグレードする Hadoop ディストリビューションバージョン	サポート対象アップグレードバージョン
MapR 4.0.2	MapR 4.1.0
MapR 4.0.2	MapR 5.0.0
MapR 4.1.0	MapR 5.0.0
MapR 5.2.0	MapR 6.0.0

表 4: Hortonworks

アップグレードする Hadoop ディストリビューションバージョン	サポート対象アップグレードバージョン
Hortonworks 2.2 (ambari 1.7.0 centos6.tar.gz)	Hortonworks 2.3 (注) <b>Ambari-2.1.1-centos6.tar.gz</b> をダウンロードします ( <a href="http://public-repo-1.hortonworks.com/ambari/centos6">http://public-repo-1.hortonworks.com/ambari/centos6</a> から)。

## デジタル署名されたイメージ

ビッグデータ向け Cisco UCS Director Express イメージは、デジタル署名された ZIP ファイルで配信されます。これらの署名された ZIP ファイルは、次のものを含むコンテナ ZIP ファイルにラップされます。

- デジタル署名された ZIP ファイル：ビッグデータ向け Cisco UCS Director Express のインストールまたはアップグレードイメージが含まれています。
- 検証プログラム：証明書チェーンと署名を確認します。証明書チェーンの検証中に、プログラムはシスコの SubCA 証明書とルート CA 証明書を使用してエンドエンティティ証明書の信頼性を確認します。その後、認証されたエンドエンティティ証明書を使用して署名を確認します。
- デジタル署名ファイル：インストールまたはアップグレード前に確認できる署名が含まれています。
- 証明書ファイル：デジタル署名を確認できます。このシスコ署名 x.509 エンドエンティティ証明書には、署名の確認に使用できる公開キーが含まれています。この証明書は、<http://www.cisco.com/security/pki/certs/crcam2.cer> に掲示された Cisco ルートにチェーンされています。
- ReadMe ファイル：デジタル署名された ZIP ファイルを確認するために必要な情報と手順を提供します。

イメージはオフラインで確認します。イメージを確認したら、ビッグデータ向け Cisco UCS Director Express のインストールまたはアップグレードを開始できます。

## デジタル署名されたイメージの確認の要件

ビッグデータ向け Cisco UCS Director Express のデジタル署名されたイメージを確認する前に、ローカルマシンで次の条件が満たされていることを確認します：

- 検証プロセス中に <https://www.cisco.com> に接続できること
- Python 2.7.4



- OpenSSL

## デジタル署名されたイメージの確認

始める前に

[Cisco.com](http://Cisco.com)から ビッグデータ向け Cisco UCS Director Express イメージをダウンロードします。

**ステップ 1** [Cisco.com](http://Cisco.com) からダウンロードしたファイルを解凍し、次のファイルが含まれていることを確認します。

- ReadMe ファイル
- デジタル署名された ZIP ファイル (CUCSD\_6\_6\_0\_0\_66365\_VMWARE\_GA.zip、CUCSD\_6\_6\_0\_0\_66717\_HYPERV\_GA.zip、cucsd\_patch\_6\_6\_0\_0\_66365.zip など)
- 証明書ファイル (UUCS\_GENERIC\_IMAGE\_SIGNING-CCO\_RELEASE.cer など)
- イメージ用に生成されたデジタル署名 (CUCSD\_6\_6\_0\_0\_66365\_VMWARE\_GA.zip.signature、CUCSD\_6\_6\_0\_0\_66717\_HYPERV\_GA.zip.signature、cucsd\_patch\_6\_6\_0\_0\_66365.zip.signature など)
- 署名検証プログラム (cisco\_x509\_verify\_release.py など)

**ステップ 2** ReadMe ファイルに記されている手順を確認します。

(注) 次の手順と ReadMe の手順に違いがある場合は、ReadMe の手順に従ってください。

**ステップ 3** ダウンロードしたコンテンツを解凍したディレクトリから、署名の検証プログラムを実行します。

例：アップグレードパッチの署名の検証

```
python ./cisco_x509_verify_release.py -e UCS_GENERIC_IMAGE_SIGNING-CCO_RELEASE.cer
-i cucsd_patch_6_6_0_0_66365.zip -s cucsd_patch_6_6_0_0_66365.zip.signature -v dgst -sha512
```

例：VMware OVF インストールの署名の検証

```
python ./cisco_x509_verify_release.py -e UCS_GENERIC_IMAGE_SIGNING-CCO_RELEASE.cer
-i CUCSD_6_6_0_0_66365_VMWARE_GA.zip -s CUCSD_6_6_0_0_66365_VMWARE_GA.zip.signature -v dgst -sha512
```

例：Hyper-V VHD インストールの署名の検証

```
python ./cisco_x509_verify_release.py -e UCS_GENERIC_IMAGE_SIGNING-CCO_RELEASE.cer
-i CUCSD_6_6_0_0_66717_HYPERV_GA.zip -s CUCSD_6_6_0_0_66717_HYPERV_GA.zip.signature -v dgst -sha512
```

**ステップ 4** 出力を確認し、検証が成功したことを確認します。

例：アップグレードの予想される出力

```
Downloading CA certificate from http://www.cisco.com/security/pki/certs/crcam2.cer ...
Successfully downloaded and verified crcam2.cer.
Downloading SubCA certificate from http://www.cisco.com/security/pki/certs/innerspace.cer ...
Successfully downloaded and verified innerspace.cer.
Successfully verified root, subca and end-entity certificate chain.
Successfully verified the signature of cucsd_patch_6_6_0_0_66365.zip using
UCS_GENERIC_IMAGE_SIGNING-CCO_RELEASE.cer
```

例：VMware OVF インストールの予想される出力

```
Downloading CA certificate from http://www.cisco.com/security/pki/certs/crcam2.cer ...
Successfully downloaded and verified crcam2.cer.
Downloading SubCA certificate from http://www.cisco.com/security/pki/certs/innerspace.cer ...
Successfully downloaded and verified innerspace.cer.
Successfully verified root, subca and end-entity certificate chain.
Successfully verified the signature of CUCSD_6_6_0_0_66365_VMWARE_GA.zip using
UCS_GENERIC_IMAGE_SIGNING-CCO_RELEASE.cer
```

例：Hyper-V VHD インストールの予想される出力

```
Downloading CA certificate from http://www.cisco.com/security/pki/certs/crcam2.cer ...
Successfully downloaded and verified crcam2.cer.
Downloading SubCA certificate from http://www.cisco.com/security/pki/certs/innerspace.cer ...
Successfully downloaded and verified innerspace.cer.
Successfully verified root, subca and end-entity certificate chain.
Successfully verified the signature of CUCSD_6_6_0_0_66717_HYPERV_GA.zip using
UCS_GENERIC_IMAGE_SIGNING-CCO_RELEASE.cer
```

---

### 次のタスク

ビッグデータ向け Cisco UCS Director Express をインストールまたはアップグレードします。

## アップグレードベアメタルエージェント

ベアメタルエージェントのアップグレードの詳細については、[『Cisco UCS Director Upgrade Guide』](#)を参照してください。

## Cisco UCS Manager アカウントの設定

各 Cisco UCS Manager アカウントは、Cisco UCS Director Express for Big Data で管理される必要がある単一の Cisco UCS ドメインを表します。「[Cisco UCS Manager 管理ガイド](#)」を参照してください。

## インスタントHadoopクラスタを作成するハイレベルワークフロー

**ステップ1** Cisco UCS Manager アカウントを作成します。[『Cisco UCS Director Management Guide for Cisco UCS Manager』](#)を参照してください。

**ステップ2** ビッグデータ IP プールを設定します。[『ビッグデータ IP プールの追加』](#)を参照してください。

ステップ3 インスタント Hadoop クラスタを作成します。『[インスタント Hadoop クラスタの作成](#)』を参照してください。

---

## カスタマイズ Hadoop クラスタを作成するハイレベルワークフロー

---

- ステップ1 ビッグデータの Cisco UCS サービス プロファイル テンプレートを設定します。詳細については、「[Cisco UCS Service Profile Template for Big Data の作成](#)」を参照してください。
- ステップ2 Hadoop クラスタ設定パラメータ テンプレートを作成します。「[Hadoop クラスタ設定パラメータ テンプレートの作成](#)」を参照してください。
- ステップ3 Hadoop クラスタ プロファイル テンプレートを設定します。「[Hadoop クラスタ テンプレートの作成](#)」を参照してください。
- ステップ4 Hadoop クラスタ 導入 テンプレートを設定します。「[Hadoop クラスタ 展開 テンプレートの作成](#)」を参照してください。
- ステップ5 カスタマイズされた Hadoop クラスタを作成します。「[カスタマイズされた Hadoop クラスタの作成](#)」を参照してください。
- 

## デバイス コネクタ

デバイス コネクタは、Cisco UCS Director Express for Big Data をクラウドホスト型のサーバ管理システムである Cisco Intersight に接続します。これにより、Cisco UCS Director Express for Big Data を Cisco Intersight を使用して管理およびモニタできるようになります。

クラウド内の Cisco Intersight にデバイスを登録するには、次の手順を実行します。

1. デバイス コネクタ プロキシ設定を行い、を Cisco Intersight に接続します。  
これは、プロキシ設定が有効な場合にのみ必要です。
2. デバイスのシリアル番号とセキュリティ コードを使用して、Cisco Intersight からデバイスへのアクセスを検証し、デバイスを要求します。



(注) Cisco UCS Director Express for Big Data を実行中のシステムが Cisco Intersight で要求された後、[デバイス コネクタ] 画面で表示される画面を更新する必要があります。[管理 > デバイス コネクタ] を選択して更新情報を表示します。

---

## デバイスコネクタの設定

ステップ1 Choose [管理 (Administration)] > [デバイスコネクタ (Device Connector)] を選択します。

ステップ2 [All] > [Device Connector] の順に展開します。

ステップ3 (任意) [HTTPS Proxy Settings] をクリックします。

[HTTPS Proxy Settings] ウィンドウが表示されます。デフォルト設定は、**オフ**です。

ステップ4 (任意) HTTPS プロキシ設定を有効にして設定するには、[Manual] をクリックし、次の情報を入力します。

- [Proxy Hostname/IP] フィールドに、プロキシホスト名または IP アドレスを入力します。
- [Proxy Port] フィールドにプロキシポート番号を入力します。
- プロキシサーバへのアクセスを認証するには、[Authentication] モードをオンにし、[Username] と [Password] に入力します。
- [Save (保存)] をクリックします。

Cisco Intersight への接続に基づき、[ステータス] フィールドでは、次のメッセージのいずれかが表示されます。

- Cisco Intersight への接続が成功すると、ステータス メッセージでしたが、次のいずれかになります。
  - **要求元不明** : 接続が成功したが、デバイスの要求されていないことを意味します。要求していない接続は、Cisco Intersight を使用して要求できます。

デバイスの要求についての詳細は、Cisco Intersight ユーザ インターフェイスの **[オンライン ヘルプ]** メニューにある、「デバイスを要求するには?」というタイトルの統合ガイド付きチュートリアルを参照してください。
  - **要求済み** : Cisco Intersight への接続に成功すると、デバイスを要求したことを意味します。
- Cisco Intersight への接続が失敗すると、ステータス メッセージは次のいずれかとなる可能性があります。
  - **管理者によって無効化** : 管理者が Cisco Intersight からデバイスを管理する機能を無効にしたことを意味します。
  - **証明書の検証エラー** : システムに無効な証明書が存在することを意味します。
  - **要求なし** : デバイスが登録されましたが、Cisco Intersight で要求されていないことを意味します。
  - **DNS が設定されていません** または **DNS が設定が誤っていません**。
  - **サービスの DNS 名を解決できません** : DNS が設定されているが、Cisco Intersight プラットフォームの DNS 名を解決することができないことを意味します。
  - **NTP が設定されていない**

- ネットワーク接続を確立できません : Cisco UCS Director が Cisco Intersight に接続できないことを意味します。

## デバイス コネクタのプロパティの表示

ステップ1 Choose [管理 (Administration) ] > [デバイスコネクタ (Device Connector) ] を選択します。

ステップ2 続く次の画面で、次の情報を確認します。

名前	説明
<b>[Intersight Management] 領域</b>	
現在の状態インジケータ	Cisco Intersight 管理プラットフォームへの接続が有効になっているかどうかを表示します。次のいずれかになります: <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>イネーブル</b></li> <li>• <b>Disabled</b></li> </ul>
アクセス モード	Cisco Intersight 管理プラットフォームへの接続の現在のアクセスモードを表示します。次のいずれかになります: <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>[Read-only]</b> — レポートの表示のみが許可されます。</li> <li>• <b>[Allow Control]</b> — 管理者としてすべての操作を実行できます。</li> </ul>
<b>[Connection] 領域</b>	

名前	説明
[HTTPS Proxy Settings] ボタン	<p>HTTPSプロキシ設定が無効か、または手動で設定されているかどうかを示します。次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• [Off] : HTTPS プロキシ設定を無効にする場合に、このオプションを選択します。 これがデフォルトのHTTPSプロキシ設定です。</li><li>• [Manual] : HTTPS プロキシ設定を有効にする場合に、このオプションを選択します。<ul style="list-style-type: none"><li>• [Proxy Hostname/IP] : プロキシのホスト名または IP アドレスを入力します。</li><li>• [Proxy Port] : プロキシポート番号を入力します。</li><li>• [Authentication] : プロキシサーバへのアクセスを認証するには、このオプションを有効にします。 アクセスを認証するユーザー名とパスワードを入力します。</li></ul></li></ul>

名前	説明
Status (ステータス)	<p>Cisco Intersight 管理プラットフォームへの接続の現在のステータスです。次のいずれかになります:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>管理者によって無効化</b> : 管理者が Cisco Intersight からデバイスを管理する機能を無効にしたことを意味します。</li> <li>• <b>証明書の検証エラー</b> : システムに無効な証明書が存在することを意味します。</li> <li>• <b>要求中</b> — デバイスが Cisco Intersight で要求されていることを示します。</li> <li>• <b>要求なし</b> : デバイスが登録されましたが、Cisco Intersight で要求されていないことを意味します。</li> <li>• <b>DNS が設定されていません</b> または <b>DNS が設定が誤っていません</b>。</li> <li>• <b>サービスの DNS 名を解決できません</b> : DNS が設定されているが、Cisco Intersight プラットフォームの DNS 名を解決することができないことを意味します。</li> <li>• <b>NTP が設定されていない</b></li> <li>• <b>ネットワーク接続を確立できません</b> : Cisco UCS Director が Cisco Intersight に接続できないことを意味します。</li> </ul> <p>接続が失敗した理由について確認するには、<b>[Details &amp; Recommendations]</b> ドロップダウンリストをクリックし、<b>[Retry connection]</b> をクリックします。</p>
デバイス ID	デバイス固有のシリアル番号です。

## から Cisco UCS Director Express for Big DataCisco Intersight を起動する

デバイスコネクタが設定されデバイスが供給された後、から Cisco UCS Director Express for Big DataCisco Intersight ユーザ インターフェイスを起動できます。。



**重要** Cisco UCS Director Express for Big Data サービスのいずれかがダウンした場合、 から Cisco UCS Director Express for Big DataCisco Intersight を起動できません。

サービスがないことを示すメッセージが表示されます。

から Cisco UCS Director Express for Big DataCisco Intersight を起動できますが、以下のように注意する必要がある制限がいくつかあります。

- ユーザ プロファイルは編集できません。
- 任意のインポートとエクスポートのアクションを実行できません。
- メインメニューとダッシュボードが無効になっています。
- **[デバイス コネクタ]** タブは表示されません。
- 起動操作を実行することはできません。
- コネクタ パックをアップグレードすることはできません。
- サマリ レポートを生成することはできません。
- Cisco Intersight を起動するときに、Cisco UCS Director Express for Big Data ユーザとしてユーザ名が表示されます。
- すべてのサービス要求と監査の詳細については、管理ユーザとして記録されます。

**ステップ 1** Cisco Intersight ユーザ インターフェイスにログインします。

**ステップ 2** **[デバイス]** を選択します。

**[デバイス]** 画面が表示され、利用可能な Cisco UCS Director Express for Big Data システムのリストを示します。

**ステップ 3** リストから Cisco UCS Director Express for Big Data デバイスを選択し **[...]** をクリックします。

デバイスのリストを右にスクロールし、**[...]** オプションを表示する必要があります。

(注) の Cisco UCS Director Express for Big DataCisco Intersight デバイスに表示される IP アドレスは、Cisco UCS Director Express for Big Data の発信メール サーバを設定している際に、**[サーバの IP アドレス]** フィールドに入力した IP アドレスによってけっちされます。

デバイス コネクタ プロセスが起動した後にサーバーの IP アドレスを変更する場合は、デバイス コネクタ プロセスを再起動する必要があります。これを行うには、Cisco UCS Director Express for Big Data デバイスにログインし、次のコマンドを実行します。

```
/opt/infra/bin/stopdc.sh
/opt/infra/bin/startdc.sh
```

Cisco Intersight の **[デバイス]** 画面を更新して、更新されたサーバの IP アドレスを表示します。

**ステップ 4** **[UCSD の起動]** を選択します。



Cisco Intersight は Cisco UCS Director Express for Big Data システムに接続され、Cisco UCS Director Express for Big Data ユーザ インターフェイスを新しいタブで開きます。

(注) Cisco Intersight で作成された読み取り専用権限を持つユーザはアクションを実行できません。これらのユーザは、レポートのみ表示できます。

## コネクタ パックの管理

コネクタ パックは、他のコネクタに影響を与えることなく、Cisco UCS DirectorCisco UCS Director Express for Big Data のコネクタ レベルアップグレードを実行することをサポートします。Cisco UCS DirectorCisco UCS Director Express for Big Data を実行中のシステムが Cisco Intersight で要求された後、システム管理者として、アップグレードに利用可能なコネクタ パックの新しいバージョンの情報を表示できます。ユーザ インターフェイスの上部のヘッダー ウィンドウには、新しいコネクタ パック バージョンが利用可能であることを示す通知が表示されます。システムのコネクタ パックを選択しアップグレードできます。詳細については、[コネクタ パックのアップグレード \(34 ページ\)](#) を参照してください。

以下は、本リリースで利用可能なコネクタです。

- Cisco UCS Central および Cisco UCS Manager を含む Cisco UCS
- ACI APIC
- ACI マルチサイト コントローラ
- F5 ロード バランサ
- ネットワーク デバイス
- EMC Isilon
- EMC RecoverPoint
- EMC VMAX
- EMC VNX
- EMC VNXe
- EMC VPLEX
- EMC Unity
- EMC XtremIO
- IBM
- NetApp ONTAP
- VCE VisionIO
- Microsoft Hyper-V

- RedHat KVM
- Vmware
- ベアメタル エージェント
- Cisco IMC
- Cisco BigData Express
- Cisco HyperFlex



**重要** これらのコネクタの最新バージョンは、Cisco Intersight を通してのみ Cisco UCS DirectorCisco UCS Director Express for Big Data で利用可能になります。したがって Cisco UCS DirectorCisco UCS Director Express for Big Data を Cisco Intersight で要求する必要があります。

## コネクタ パックのアップグレード

システム管理者として、Cisco UCS Director Express for Big Data グラフィカル ユーザ インターフェイスを使用して、コネクタパックをアップグレードできます。新しいコネクタパックバージョンが利用可能な場合は、ユーザ インターフェイスのヘッダー ウィンドウには、下向き矢印のイメージと番号とともにアラートが表示されます。この番号は、アップグレードに利用可能なコネクタ パックの数を示します。ヘッダー ウィンドウのこの通知は、Cisco UCS Director Express for Big Data が Cisco Intersight で主張されたときのみ表示されます。Cisco Intersight との接続の確立に関する情報は、[デバイス コネクタの設定 \(28 ページ\)](#) を参照してください。



(注) スタンドアロン設定でのみコネクタパックバージョンをアップグレードできます。複数のノードのセットアップでコネクタ パック バージョンにアップグレードできません。

### 始める前に

- システム管理者権限があります。
- Cisco UCS Director Express for Big Data が Cisco Intersight で要求されました。
- Cisco UCS Director Express for Big Data は正常に Cisco Intersight へ接続しました。

**ステップ 1** ヘッダーで、[アップグレードに利用可能なコネクタ パック] をクリックします。

[アップグレードの利用可能なコネクタ パック] 画面に、バージョン情報とともにアップグレードに利用可能なコネクタ パックのリストが表示されます。

(注) [アップグレードに利用可能なコネクタ パック] アイコンが、現在の実行中のコネクタ パックの新しいバージョンがアップグレードに利用可能な場合にも、ヘッダーに表示されます。

**ステップ 2** リストからコネクタ パックのチェック ボックスをオンにします。

複数のコネクタ パックのチェック ボックスをオンにできます。

**ステップ 3** **[Upgrade]** をクリックします。

**ステップ 4** **[Confirm Upgrade]** ダイアログ ボックスで、**[Yes]** をクリックします。

コネクタのバージョンをアップグレードする必要があることを確認した後、検証プロセスが開始されます。検証プロセスが正常に完了した場合、アップグレードプロセスが開始され、**[Connector Pack Upgrade Status]** 画面にアップグレードのステータスが表示されます。アップグレードプロセスが成功した後、**[Logout]** オプションが有効になっています。ステップ 5 に進みます。

以下は、いくつかの検証およびアップグレードプロセスの可能な成果です。

- コネクタ パックの問題により検証プロセスが失敗した場合、**[Connector Pack Validation]** 画面にエラーの詳細と是正措置が表示されます。

情報を確認し、**[Close]** をクリックします。

- コネクタ パックのアップグレードプロセスが失敗した場合、**[Close]** をクリックします。

(注) コネクタ パックのいずれかのアップグレードに失敗した場合、コネクタ パックは以前のバージョンにロールバックされます。

- 他のユーザがシステムにログインした場合、もしくはワークフローが実行中の場合、検証プロセスに失敗します。適切な是正措置とともにアップグレード失敗のエラー メッセージが表示されます。

是正措置を確認し、**[Force Upgrade]** をクリックして、コネクタ パックのアップグレードを続行します。

**[Connector Pack Upgrade Status]** 画面には、コネクタ パック アップグレード要求の現在のステータスが表示されます。その他のユーザは、アップグレードに関するシステムブロードキャストメッセージとともにシステムから自動的にログアウトされ、ログイン ページにリダイレクトされます。

(注) コネクタ パック アップグレードが進行中のときに、およびシステム管理者権限を持つ別のユーザがシステムにログインする場合、**[Connector Pack Upgrade Status]** 画面にはアップグレードプロセスのステータスが表示されます。コネクタ パック アップグレードが進行中のとき、およびエンドユーザがシステムにログインする場合、システムの起動ページが表示されます。

**ステップ 5** **[Logout]** をクリックします。

アップグレードの完了後に Cisco UCS Director Express for Big Data にログインできます。

### 次のタスク

**[Administration] > [System] > [Connector Pack Upgrades]** を選択して、アップグレード レポートを表示できます。この画面から、レポートをダブルクリックして、アップグレードプロセスについての詳細を表示できます。詳細については、[コネクタ パックのアップグレードに関する情報を表示する \(36 ページ\)](#) を参照してください。

# コネクタパックのアップグレードに関する情報を表示する

---

**ステップ1** [Administration] > [System] を選択します。

**ステップ2** [System] ページで、[Connector Pack Upgrades] をクリックします。

アップグレードのリクエストID、アップグレードを開始したユーザ、アップグレードの開始時刻と終了時刻、およびアップグレードのステータスといった情報が表示されます。

**ステップ3** コネクタパックの名前、アップグレードされたバージョン、および以前のバージョンといった詳細を表示するには、コネクタパックを選択して [View Details] を選択します。

**ステップ4** コネクタパックのアップグレードプロセスのさまざまな状態を表示するには、[State History] をクリックします。たとえば、アップグレードリクエストを受信、アップグレードプロセスを開始、またはアップグレードプロセスを完了などです。

**ステップ5** コネクタパックのアップグレードリクエストのライフサイクル全体を表示するには、[Stages] をクリックします。

---